内閣総理大臣賞（最優秀賞）

時をこえて　～未来へ～

宮城県　宮城県仙台二華中学校　三年　井崎　英里

雪どけを迎えた春、私は「ダムより高い鯉のぼり」の記事を新聞で見つけ、釜房ダムを訪ねました。目の前に広がる森と湖。優雅に泳ぐ鯉のぼり。そんな美しい春の景色を、一枚の風景画として残したいと思ったからです。

釜房ダムとは、私の住む仙台市より西の、宮城県のほぼ中央を流れる名取川の支川、碁石川上流の川崎町という小さな町に作られた特定多目的ダムです。上流の太郎川、北川、前川より集められた水は、ダムによる釜房湖となり、私が訪ねた日も、湖いっぱいに満たされた水一面が、遙か遠くは瑠璃色に、時々太陽の光を浴びて金色に輝いて見えました。ダムを囲むように連なる山々の緑、春を知らせる満開の桜の淡い紅色、ダムのゲートから流れ出るしろかね色の水、そんな風景画のような世界の大空を、大きな鯉のぼりがのびのびと泳いでいました。これが私の国、日本の水の源であり、この地球が「水の惑星」と呼ばれる由縁なのでしょう。

世界には、水資源に恵まれていない国が数多くあると聞いています。水の惑星と呼ばれる地球であっても、利用可能な淡水の割合は極わずかで、ほとんどが海水、私たち人間をはじめ、あらゆる生物が生きるために使える水ではないのです。

この三月に訪ねたシンガポールもまた、水問題を抱えた国の一つでした。赤道直下に位置し、年中気温と湿度が高く、降水量も多い国であるのに、狭い国土には大きな河川も雨水を貯める土地もありません。さらには国土自体の保水力も乏しいことから、飲み水のほとんどを隣国からの輸入に頼っていると聞きました。飲み水が手に入らないわけではないのですが、滞在初日に、蜜柑色をした三一〇ミリリットルのボトルを渡され、滞在期間中私は、毎朝このボトルに水を入れて持たされることとなりました。水を贅沢に使う観光が有名な都市の、現実の水問題に私は強い衝撃を受け、いつも以上に水を大切にいただくように心がけました。

シンガポールの水事情を思い出しながら、私は自分の国である日本のことを考えました。日本には四季があり、梅雨や秋雨の影響で、一年の降水量に大きな変化はあるものの、世界的に見れば、恵まれた水環境のはずです。自宅にも学校にも、街のいたる所に水道が引かれ、その蛇口をひねれば、水やお湯がすぐに流れ出ます。そのため、私たち日本人は、いくらでもあるもののたとえに「湯水の如く」と使うのです。果たして水は、本当にいくらでもあるものなのでしょうか。

私の忘れかけていた記憶、忘れようとしている記憶「東日本大震災」。小学校一年生も終わろうとしている春のあの日まで私は、水のない生活をしたことも、考えたこともありませんでした。蛇口から水の出ない日々、やっと水を手にできた時の喜びを、私は忘れられません。空から容赦なく降る雪も、沿岸の町を襲った津波もまた、水の別な姿であることが恨めしく、未来の見えない不安に誰もが涙を流した日々。時間という魔法が、少しずつ人々の心を癒やしてくれてはいるものの、何かを皮切りとし、水の隠された本性、恐ろしい姿を度々思い出すのです。

あの日から、水に対する私たちの見解は確実に変わりました。水を大切にすると同時に、いつの日か再び変貌する水の姿に警戒し、備えるための訓練を続けています。

釜房湖の美しい水を眺めながら、ふと、かつてのこの湖の下に存在した豊かな耕地の広がる小さな町のことを考えました。そこに暮らしていた人々の思いと、今、目の前に広がる美しい湖とダムが、現在の私たちに不自由なく水を提供しているという現実をです。

残すべき水の歴史は、震災だけではありませんでした。今日見たこの美しい風景を、私は過去と共に未来へ描き残したいと思います。